

A nationwide survey of pediatric acquired demyelinating syndromes in Japan

高田, 結

<https://hdl.handle.net/2324/1866371>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

(別紙様式2)

氏名	高田 結 (旧姓:山口)				
論文名	A nationwide survey of pediatric acquired demyelinating syndromes in Japan				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	北園	孝成
	副査	九州大学	教授	飛松	省三
	副査	九州大学	教授	鴨打	正浩

論文審査の結果の要旨

後天性脱髄症候群 (ADS) は後天的な中枢神経系の炎症性脱髄を特徴とする神経疾患の総称であり、急性散在性脳脊髄炎 (ADEM)、多発性硬化症 (MS)、視神経脊髄炎 (NMO) を含む概念である。申請者は、我が国の小児 ADS の実態を明らかにするために全国調査を実施した。

標準的な疫学調査手法により病院を選出し、2005-2007年に受診した小児 ADS 患者数を調査した後、調査票を用いて臨床像を調査した (九州大学医学研究院等倫理委員会承認番号 20-64)。患者数調査 (回答率 74.0%) では、小児 ADS 患者 439 例 (含 ADEM 244 例、MS 117 例、NMO 14 例) が集積され、臨床像調査 (回答率 74.9%) では 204 例 (含 ADEM 66 例、MS 58 例、NMO 10 例) が集積された。解析の結果、我が国の小児 ADEM の推定罹患率は小児 10 万人当り年間 0.40 人 (95%信頼区間: 0.34-0.46 人) であり、北部で低い傾向を認めた。一方、小児 MS の推定有病率は小児 10 万人当り 0.69 人 (95%信頼区間: 0.58-0.80 人) であり、南部で低い傾向を認めた。小児 NMO の推定有病率は小児 10 万人当り 0.06 人 (95%信頼区間: 0.04-0.08 人) であった。小児 ADS 患者の男女比と発症平均年齢は ADS のタイプによって異なり、女性の割合が高いタイプほど発症年齢が高かった。本調査により我が国の小児 ADS の疫学的ならびに臨床的特徴が初めて明らかとなった。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と判定した。